

檜原村の狼信仰

西村 敏也

はじめに

一 檜原村の狼信仰と狼信仰寺社の諸相

二 臼杵神社の狼信仰と坂本家

三 臼杵神社の祭礼

おわりに

はじめに

狼信仰とは、狼（オオヌサマ）を山の神の「使い」「御眷属」もしくは「警護者」と指定し、神のごとく崇める信仰形態のことである。当初は、民俗の中で発生したと考えられるが、後に寺社がその信仰形態を自己に取り込み展開させたものと思われる。そして、それらの寺社では、狼の護符の頒布・信仰対象である狼に関する儀礼や神事存在・狼像の奉納を請けている・信仰集団の存在・狼信仰に関する由緒の保持・寺社の周縁部に狼に関する伝承が存在しているなど、様々な事象が展開している。¹⁾

本稿で取り扱う檜原村は、東京都心から西へ約六〇kmに位置し、村域には一千以上の山々が折り重なるように存在し、その山々の間を縫うように川が流れ、集落がそれらの川沿いに、そして山の尾根に点在している。中世以来、林業を主産業としてきたが、現在は観光が産業の根幹を成している。明治時代までは、実際にニホンオオカミが多く棲息していた地域ということから、狼にまつわる伝承も多く残され、小祠に狼像が

祀られている現象も見られ、かつてこの地域で狼と人の交流が栄んでいたことが偲ばれる。

本稿の課題とするところは、今まで発表してきた狼信仰に関わる拙稿²⁾に檜原村の事例を加え、狼信仰という事象の総体へ迫ることにある。そして、もう一つ課題がある。現状では檜原村の狼信仰の成立と展開、そして現在の信仰の在り方、意義など明かにできない側面が多くなっている。狼像などのモノのみが存在し、それにとりまわりの儀礼・習俗は廃れ、その由来すら分からなくなっている。現在でも儀礼・信仰がおこなわれているものであっても、今後展開していくことの保証はなく、この貴重な文化が消えゆく方向にあることがうかがえる。故に、これらの現象を書き留めておきたいと考えた。将来、狼信仰の総体へ迫る過程で、ここに記した断片的な資料が、檜原村の狼信仰解明へ役立つことに期待したい。

さて、本稿は、文献史料、伝承資料、フィールドワークで得られた資料を組み合わせながら、描き出して行く。まず第一章では、檜原村で展開する狼の伝承、大岳神社、檜原村笹久保地区の鎮守である貴布祢神社という狼像が奉納されている神社の様相を紹介し、そして、第二章、第三章では個人の家の氏神であり、同時に旧村・大字の地域社会の守護神とも考えられ、個人の家を中心としつつも地域社会が支えている臼杵神社の狼信仰の様子を紹介したい。

一 檜原村の狼信仰と狼信仰寺社の諸相

1 檜原村の狼をめぐる伝承

檜原村では、古くはニホンオオカミが棲息していたことから、人と狼の接点を描く伝承が多く伝えられている。檜原村に伝わる伝承事例として「山で狼からのがれた話」「狼を撃退したおばあさん」「狼の恩返し」「狼がのり移った話」「狼の糞を崇める」や狐憑きの患者が出た場合、狼の頭骨を借りて来て憑きもの落としをし、その時修験が関与したともいう話、村に変事が起こるときには必ず夜陰に御犬様が啼いて警戒を促すといわれている話などが挙げられる。また、狼の乳を飲んだ人の話も伝わっており、その興味深さからか狼をめぐる伝承の事例として多くの文献に記されている。また、檜原村人里の飯綱社に納められていたそれまで蛇の骨と推定されていた骨が（収納される箱には明治一〇年八月一八七七√南秋川河原で採集と記録され、現在は、檜原村郷土資料館に收藏されている）、狼の椎骨・肋骨と鑑定されたことも多くの文献に記された。これら類似の伝承は、奥多摩・秩父地域全体で見られるものだが、山深い地勢からも実際のニホンオオカミと遭遇することが多かった故であろうか、ここ檜原においては濃密に分布している印象がある。それだけに、狼にまつわる様々な言説は、狼信仰の展開に大きな役割を果たしたことが想像できよう。それでは、このような民俗の中の狼信仰が神社の信仰の中に取り込まれた場合、どのような現象を見せうるのだろうか。

2 大岳神社の狼信仰

檜原村には、オイヌサマ像（狼像のことであるが、以下檜原村では一般的に崇められる狼のことをオイヌサマと称しているので、オイヌサマと用語統一して記述していく）が奉納されている神社が多々あるが、その規模が大きくまた周知されている神社として、大岳山とそれを奉育する大岳神社を挙げることができる。大岳山は、檜原村白倉にある標高一二六六呎の山岳であり、その頂上に大岳神社本殿が祀られている。また、山麓には遙拝所として大岳神社里宮が祀られ、現在の祭祀はそこでおこなうことも多くなっている。主たる祭神は「大國主命」「少彦名命」「日本武尊」「廣國押武金日天皇」（安閑天皇）「源家康朝臣」の五柱である。

次に、大岳神社の歴史に関してである。『西多摩郡村史』¹⁾に記されている大岳神社の歴史は、その後の神社誌類でも踏襲され、大岳山の歴史として最も多く知られているものである。すなわち、次のような歴史である。産土神として「大國主命」「少彦名命」が祀られ、ヤマトタケルの東征後、在地の民衆がその偉業を顕彰し「日本武尊」を合祀し大岳大神を山頂に祀り、その後「廣國押武金日天皇」（安閑天皇）を合祀して蔵王権現と改めたという。本社は、小宮領の総社とも云われ北条氏康の加護、後に徳川家康の加護を受けたという。ちなみに、産土神として祀られたというのは、古い時代に在地に素朴な山岳信仰がまず発生し、地域住民により崇められるようになったことを示していると思われる。また、「廣國押武金日天皇」を合祀して蔵王権現と改めたというくだりであるが、次のような状況であったことが考えられる。すなわち『新編武蔵風土記稿』にあるように、天平一九年（七四七）に大和吉野より現在

の社家吉野家の祖とされる宿辺少将橘高安（社家吉野氏の先祖とされる）によって「広国押武金日天皇」が勧請合祀された⁽¹³⁾。役行者が感得するにあたって蔵王権現が「広国押武金日天皇」であると名乗ったとされたことから、「広国押武金日天皇」は蔵王権現と合体とみなされるようになる⁽¹⁴⁾。大岳山は『新編武蔵風土記稿』に「郡中第一の高山にして蔵王権現を鎮座す⁽¹⁵⁾」とあるようにその神格は蔵王権現とされているし、実際、神社で西暦七四七年に蔵王権現が祀られるようになったと伝えられていることから、「広国押武金日天皇」を祀ったという文言は、蔵王権現を祀ったということに置き換えられよう。ちなみに、社家吉野家は大和吉野より移り住んだ修験系の家と伝えられていることから、「広国押武金日天皇」を勧請した橘高安は熊野修験であったと考えられる。蔵王権現は、「大國主命」「少彦名命」「日本武尊」とも合体とされるため、これらの神々も蔵王権現が祀られた後に、いつの時期かは断定できないが祀られるようになったことが考えられる。また、『新編武蔵風土記稿』に「慶安二年秋八月社領十五石の御朱印を賜はり、明る（ママ）十三年江城擁護の御祈禱をつとむべき旨を被り、今に至るまで一萬度の祓を修行すといへり」と記されているように社家である吉野家と徳川家との深い関係が存在したことから、家康を主祭神の一つとして祀るようになったことが考えられる。ただ、吉野家が慶長年間、嘉永三年（一八五〇）の二回火災に遭い旧記類を焼失してしまっているため、詳細な歴史がわからなくなっているのが現状である。

次にオイヌサマについてである。大岳神社ではその守護神がオイヌサマであると伝えられており、蔵王権現が祀られた時より信仰対象になったと云われている⁽¹⁶⁾。天保六年（一八三五）の「蔵王権現神像」版木が残

されているが、そこに描かれている図像は、蔵王権現の足元に二匹のオイヌサマが向かい合って描かれているものであって、つまり、オイヌサマの位置付けは金剛蔵王権現の御眷属ということになる。現在でも、四月の例大祭には害獣除、盗難除などのご利益があるとされるオイヌサマのお札が氏子や「大岳講」の人々に頒布され、請けた人々は、ご利益に期待して戸口に貼付したりしている（写真1）。また、宝曆九年（一七五九）の年紀銘のあるオイヌサマ像が、山頂に一對奉納されている⁽²⁰⁾。ちなみに大岳神社は近世の間、大岳権現と呼ばれ、明治三年（一八七二）から大岳大神と称したが、明治四三年（一九一〇）四月、大岳神社に改められた。その際、地域の多くの神社が合祀されたため主祭神の他に多くの祭神も祀られているのである⁽²¹⁾。



(写真1) 大岳神社のお札

3 貴布祢神社の狼信仰

松原村笹久保の鎮守である貴布祢神社には、大岳山山頂に奉納されているオイヌサマ像と酷似したオイヌサマ像が祀られている。そのオイヌサマ像の年記銘は宝暦一〇年（一七六〇）である。神社拝殿の右の一带には、正面から見て、左から呷のオイヌサマ像、サソノウの祠、板碑、祠、像、祠、壊れた阿のオイヌサマ像が並べられている（写真2）。阿の像は下半身の胴体部が残っているのみで、上半身は近くには見あたらずなくなっている。貴布祢神社の祭礼は、四月三日と九月二日であるが、オイヌサマ像に特に何か供えるといったこともないという。貴布祢神社の祭神は、「国常立命」「猿田彦命」であり、現在宮司は大岳神社宮司の吉野氏の兼帯である。当地の神社総代の家である大野家の先代・先々代



（写真2）貴布祢神社の狼像

は（大正期から昭和にかけての頃のことだという）吉野氏と縁を持ったことから、神職資格を得て大岳山へ奉仕し貴布祢神社の宮司として活躍したという。貴布祢神社は正保三年（一六四六）創建と云われ、『新編武蔵風土記稿』には御嶽社として記載され、別に不動堂があり、不動尊が安置されているとの記載もある。現在も本尊は、石製の不動明王像である。明治四一年（一九〇八）には日枝神社を合祀したが、貴布祢神社へ社名を改めた時期は判然としない。オイヌサマ像の奉納という現象が見られるものの、現在その祭礼は全くおこなわれず、その信仰の意味は喪失している。その他、檜原村では、鬘野御前神社（湯久保）、伊勢清峰神社（小沢）、御前山中尾根にある大むれの山の神（神戸）の祠にオイヌサマ像が祀られているが、詳細に関しては別稿に譲りたい。

二 白杵神社の狼信仰と坂本家

1 白杵神社の狼信仰

本章と次章では、白杵神社のオイヌサマ信仰に関して検討していきたい（写真3）。基本となる資料は、二〇一二年、筆者による坂本佳昭氏への聞き取り調査によって得られた伝承資料となる。以降、特記しない限り調査から得られた資料に基づいて記述したものと考えて頂きたい。

さて、白杵山は、檜原村笹平にある標高八四二メートルの山岳である。白杵山は、檜原村とあきる野市の境界線となっているが、予てより八王子恩方、五日市（現あきる野）、山梨方面からの往来が激しい場所であった。山頂は北と南の二峰に別れており、山頂の北峰に白杵神社が祀られている。現在の祭神はイザナギ・イザナミである。現在祀られている祠には木製のものと石製の二つがある。木製の祠は、二〇一三〇年前に、自治



(写真3) 臼杵神社

会で購入して担ぎ上げたものである。石宮はそれ以前よりあったという（「大正六年五月一日再建坂本繁恒」の銘がある）。なぜ、臼杵神社の祠は柏木野の集落を背にしているのかというと、それは柏木野を背負って立つ、すなわち集落を守護しているからだという。

さて、この神社は、オイヌサマ像が一對奉納されていること、祭礼時に、オイヌサマの図像が描かれたお札が頒布されていることから、狼信仰に、オイヌサマの図像が描かれたお札が頒布されていること、祭礼時に、狼像が鎮座しているが、その二祠の左に吠の狼像が、同体は壊れ重なり合うように破片が積み重ねられ、その最上部に頭部が載せられている。右の阿の狼像は原型をとどめているが、ずんぐりとした体型の狼像である。両像とも年記銘は確認できないが、当地では、近世以来のものと伝承されてい

る（近年、その他に自治会がオイヌサマ像とは違う狍犬を一對奉納した）。次に『新編武蔵風土記稿』を中心に臼杵神社の概要、成り立ちをみていくこととしたい。

（史料1）

臼杵山 村の良にあり、登り五十丁許なる嶮岨高山なり嶺に臼杵権現を鎮す事は神社の條にしるせるなり

神社 臼杵権現社 社地凡十坪、無年貢地、村の巽の方臼杵山の絶頂にあり、小社、祭神は倉稲魂命なりと云、木の立身、長八寸許、例祭毎年二月初午日を用ゆ、山の麓に木の鳥居あり、又小名機立と云所にも木の鳥居一基を立つ、此は往昔社ありし跡なりとぞ、村民四郎右衛門が家の記に当社は応永四年鎮座なし、始は機立に有て機立の社といへり、その後永禄三年四郎右衛門が先祖某、靈夢の告を蒙りて今の地に移しまつれりとぞ、其故由は詳ならず、百姓持⁽²⁸⁾

（史料1）の『新編武蔵風土記稿』によれば神社は、応永四年（二二九七）創建と伝えられている。当初は、機織（はつたて）（南秋川柏木野）という川沿いの場所に鎮座していたが、永禄三年（二五六〇）靈夢によるお告げがあったため、現在の臼杵山頂へ遷座された。⁽²⁹⁾ 文政五年（一八二二）の『武蔵名勝図絵』⁽³⁰⁾によれば、道を通る馬の足音がうるさいという靈夢であったと記述されている。⁽³¹⁾ ちなみに、機立には現在柏木野の鎮守である春日神社のみ鎮座している。春日神社の創建は、応永四年で臼杵神社と一緒である。⁽³²⁾

臼杵神社は、近世までは臼杵権現社と呼ばれていたという。社地は

一〇坪、祭神は倉稻魂命であり、養蚕・農業の神である。境内地には「文政五年年五日市山崎三治郎」銘記の石灯籠が残っている。神社管理は坂本家（創建の繁宗の子孫と言われる）であり、代々四郎右衛門を通名としていた。近世には柏木野の村役人であったといい、屋号は「御前」であった。坂本家では多くの古文書を保有していたが、昭和四〇年（一九六五）の火災で、ほとんど焼失してしまった。⁽³³⁾

臼杵神社は、明治四三年（一九一〇）に、南郷神社（出畑）へ合祀された。⁽³⁴⁾一村一社統合制によって南郷地区の小字の春日神社・臼杵神社（以上柏木野）、日枝神社・白山権現・山神社（以上出畑）、神明社・山神社・愛宕社（以上下川乗）以上八社を合祀して、字名に合わせて南郷神社と改められた時のことである。南郷神社は、近世には三島大権現と呼ばれ、明治二九年（一八九六）には三島神社と改められ、無格社であった。康永四年（一三四五年）当地の峰岸六左衛門藤原延影が、伊豆三島社から分霊したと云われている。祭神は、大山祇命・伊弉諾尊・伊弉冉尊・天兒屋根命・大日靈貴命・軻具突智命・猿田彦である。毎年九月一五日が例大祭であり、隔年ごとに柏木野の神代神楽、下川乗の獅子舞が奉納される。神職は大岳神社宮司の吉野氏である。

臼杵神社は、制度上は当初は坂本家氏神、そして地域の守護神へ拡大、近代には神社合祀によって南郷神社末社となったのである。

2 坂本家

次に臼杵神社を氏神とする坂本家に関してみておきたい。まずは、『新編武蔵風土記稿』で坂本家に関しての記述を確認しておきたい。

（史料2）

旧家 百姓四郎右衛門坂本を氏とせり、先祖は坂本兵庫佐繁宗といへり、はじめは江州彦根の人なりしが、応永三年当所に来り住すと云、其子孫四郎右衛門某が時より平山伊豆守氏重（或云伊賀守）に仕へ、感状二通まで蔵せり、その文は左のごとし⁽³⁵⁾

坂本家先祖の繁宗が、応永三年（一三九六）に近江彦根から移り住み、後に子孫が檜原城主平山氏重に仕えた。現在、坂本家には火災があったからか、（史料2）に記述されている感状は残っていない。二通の感状は、天正八年（一五八〇）四月の小河内遠征、天正八年五月の都留郡遠征時の手柄に対して平山氏から発給されたものである。その後、豊臣秀吉の北条攻めから天正一八年（一五九〇）七月一二日平山城は落城し、平山氏は滅亡した。その後、四郎右衛門は太閤検地の頃から農民になったという。ちなみに、坂本家の伝承では、坂本家初代は南朝方であり申世になって繁宗が移り住んだという。そして坂本家本家初代の妻が柏木源氏の流れを汲んだ人であったので、現在地が柏木野という地名になったという。また、村の檀那寺である円通寺の開基も坂本家と伝承され、開山も坂本家の先祖である僧侶と云われている。『皇国地誌』では、坂本家が平山氏に士官したのは永享一年（一四三九）のことと記述され、坂本家で代々四郎右衛門を通り名にしたと記述されている。⁽³⁶⁾同書には、応永三年に（柏木野ではなく、現在南郷神社が鎮座する出畑という隣の集落である）移り住んだ後、応永四年（一三九七）に蒼稻魂命を臼杵という地名があった場所へ祀り、臼杵権現と名付けたとある。同年には天兒屋根命を勧請して機立の社と称したというが、これは後の春日社

のことと考えられる。

現在でも、臼杵神社は坂本家の氏神であるということ踏まえつつ、集落全体の守護神として五月五日に祭祀が挙行されている。一方、現在坂本家では臼杵神社の祭祀が当所は二月初午におこなわれていたことを偲び、二月初午の時坂本家だけで祭祀をおこなっている（前日に五月五日の祭祀時と同様の神饌を用意する。自宅二階の一角に臼杵神社を祀っている。本地仏とされる十一面観音を祀っている。ちなみに「お札刷り」の版木など道具一式もそこに保管している。当日朝神饌を上げて、灯明を上げ挨拶をするという）。

昭和二〇年（一九四五）八月の終戦直後、現当主坂本佳昭氏の祖父が亡くなった。当時まだ、佳昭氏の父親は九歳の子供であり、家には佳昭氏の父親と祖母だけになってしまい、臼杵神社の世話をするのが無理な状況となった。祭祀は続けられないと自治会に相談したところ、柏木野地区の人から手伝いたいという申し出があった。また、今から三〇年前、佳昭氏と次男は家を出て父親と母親だけが家にいたが、平成一四年前（二〇〇二）一二月に父親が亡くなった時、柏木野の地区でやはり手伝いたいという申し出があった。ただし、坂本家は地域の草分けの家なので、佳昭氏が中心になって進めてもらうが、地区が支えればにぎやかに祭祀をすることができるから、ということであった。現在、臼杵神社を支えるため、柏木野地区の自治会の人たちが作る臼杵神社の組織が存在する。自治会長、神社総代二名、永代総代が佳昭氏という組織である。

現在、佳昭氏は気がついた時、時々熊手を持って山頂へ登り臼杵神社の周辺の掃除、落ち葉かきをしているという。坂本家の氏神であることからの務めであると同時に、ここはハイキングコースで人の往来もある

ので手入れをしているともいう。このように、基本的には、日常の管理は坂本家がおこなっている。しかし、戦後二回ほど、やむなき理由から坂本家が祭祀へ積極的に関われなくなった時、臼杵山麓の笹平のS氏という方が中心となってその役目を担ってくれたという。そして、その時は祭祀当日、登山前には必ず皆でS氏の家に寄って、清めとして一杯飲んでから登山したものであったという。

三 臼杵神社の祭祀

1 祭祀とその準備

自治会では、四月に新年度一回目の寄り合いがもたれるが、最初の議題として例年臼杵神社の祭祀のことが挙げられるという。そこで祭祀までのスケジュール、段取りが決められる。坂本家で「お札刷り」と呼ばれるお札を刷る日、その後刷られた札などのお祓いを大岳神社宮司の吉野氏に執りおこなってもらうが、その連絡に関してなど様々なことが決められる。佳昭氏は、四月二九日が都合をつけやすく、最近はほとんどこの日を「お札刷り」の日として提案しているという。

「お札刷り」の行事が近づくと、紙が無くなっている場合、八王子本町横山町の紙問屋の大沢屋紙店に購入しに行き、お札のサイズに紙を裁断してもらう。「お札刷り」当日、まず墨を摺る。仕事が昼間あるが、早めに仕事を切り上げ帰宅し下準備をする。神聖なものに触れるということでお清めとしてシャワーを浴びる。ちなみに作業に女性は一切関わってはいけないとされている。そのため、男性だけで作業を進める。お札を刷る道具も女性はさわれないという。また、部落で不幸があると、神事に関することがストップする。道具にもさわらないようにするとい

う。まず、硯に清酒を入れて墨を摺る。墨を摺る時お酒を使うのは、ハレの時という特別なことであるという意識があったからではないかという。昔から当然のこととしておこなってきたという。お札刷り用と職刷り用の二種類の墨を摺り、墨汁入れなどの容器に入れる。オイヌサマのお札は「白杵大神侍神」の文字と一匹のオイヌサマの図像が描かれているものである（写真4）。お札は柏木野の氏子五〇軒分、その他檜原村域で所望する人のための二〇枚、大岳神社に保管しておく数枚、手元に数枚（受け取った人で無くしてしまった人に渡すため）、合計七〇枚ほどを刷る。ちなみに、白杵神社のお札は、養蚕のご利益、地域の神のご利益が顕著であると考えられている。

佳昭氏と次男そして両親は八王子犬目に出ていたが、昭和三九年（一九六四）九月、柏木野の地へ戻って来た。その時は、祖母だけが住んでいる状態であった。翌昭和四〇年（一九六五）火災に遭い、オイヌ



（写真4）白杵神社お札

サマの版木、オイヌサマのお札用朱印、養蚕の版木（養蚕の版木は、文字だけが彫られている版木であるが、現在養蚕をする人もいなくなり需要もなくなり、父親は需要がなくなつてからは刷らなかつた。また、佳昭氏は一回も刷つたことがないという）などお札を刷るための道具類一式を失つた。佳昭氏の父親は、お札を配布することを復活させるべく活動を始めた。版木を造るためには、オリジナルの図像が必要である。オリジナルの図像を復元するため、そのようなお札を探したところ八王子の恩方で持っている人が見つかり、それをもとに経済的に厳しい状況下でありながら、高額な金銭を支払い新たなオイヌサマの版木（写真5）、朱印と養蚕の版木を作つたという。ちなみにその版木はケヤキで作られたものであつた。ただ、生前父親は版木を作るまでの過程を詳細に家族に伝えなかつた。また、昭和五八年（一九八三）には、先に記したS氏が道具を入れる箱を作ってくれたという。



（写真5）白杵神社お札版木

午後七時三〇分頃、自治会の五、六名が坂本家を訪問する。自治会三役（自治会長・書記・会計）神社総代三名の合計六名である。神棚に神酒と灯明を上げて、「始めます」と報告して開始する。版木に摺った墨を筆で広げ、紙を版木の角に合わせて置き、上からバレンで広げる。バレンは、佳昭氏の父親が竹の皮を集めて手製で作ったものである。紙を剥がして横に置く。自治会の人々が朱印を押す。これを繰り返していく。乾かしたあとは、神棚に上げる。初めて参加する人は、厳肅な気持ちになつた、神聖さを感じたなどと口にするという。人の手によるものなので、どうしても失敗もある。薄くなつてオイヌサマのひげが出ない。字が出ていないなどである。特に刷り始めには、筆の跡が出たりするのでそうした場合はやり直す。同時に、白杵神社の幟、集落にある愛宕神社、秋葉神社の紅白の幟の字も書く。「白杵神社」「愛宕神社」「秋葉神社」それぞれ一対ずつ、合計六枚を書く。幟に字を書くときは、墨が布に滲まないようにチョークを塗り広めてから書く。幟は、綿の上下二ヶ所を袋状に縫い、そこに竹を入れビニールの紐で吊すという。幟は自治会長に書いてもらっている。本来誰でも良いのだが、達筆なためお願いしているという。一時間くらいで終了するが、終了すると神棚に終了の報告をする。上げた御神酒を下げ、坂本家で用意した料理で直会をする。午後九時頃には解散となる。さて、坂本家には「お宿代」が自治会から出されるが、祭礼の費用も含まれている。自治会の会計が包み、自治会の人々が四月二九日の「お札刷り」の日に坂本さんの家へ持参する。現在坂本さんが会計をしており、一応自分で包み自治会の人へ渡し改めていただく形式になっている。しかし、頂いても佳昭氏の母親である坂本トシエ氏は、祭礼の日に別の紙に包み直し、自治会へお祝い金として

出している。その他に、佳昭氏自身もお祝い金と清酒二升を自治会に出すという。父親の代の時には、祭礼などにかかった費用の領収書を出す自治会から代金が出たが、現在は坂本家の氏神だったことも鑑み自治会へ迷惑がからないうよう、坂本家で費用を負担するよう心がけているという。

準備が終わると後日、大岳神社へ訪れる。事前に自治会で吉野氏へ電話をして、都合を聞き出かける。五月三日が多いという（今年八二〇一二年は、吉野氏の都合で四月三〇日であった）。佳昭氏、柏木野の神社総代三人、柏木野自治会長の五名である。お札、紅白の幟三組（六枚）を風呂敷に包み、清酒二升と当日供える神饌を持って行つてお祓いをうける。午前一〇時に出向き正式参拝する。お札、幟を神前に上げ、玉串奉奠、神前で御神酒を頂き、祭典が終了すると、お札、幟を下げ、直会をしないで帰つて来るという。

2 祭礼当日のスケジュール

かつては、二月の初午が祭日であったが、現在は、五月五日が祭日である。祭礼が近づいた頃、坂本氏は山頂に登り白杵神社の周辺を掃除しておくという。白杵山への主たる登山口は三ヶ所ある。現在、白杵山へのハイカーは、五日市側から多く登るが、昔は笹平から登る道が白杵山の表参道として栄えた。現在でも祭礼の際は、笹平からの表参道を登るが相当な急勾配で、坂本氏も白杵山へ重いものを上げる時は、五日市側からの道がなだらかで歩きやすいため、こちらから登るといふ。

祭礼当日、登山する人が午前八時に柏木野の自治会館に集まる。予め、地域の回覧で希望者を募っておく。今年（二〇一二年）は一三人が

集まったというが、近年は、毎回その程度の人数が集まるといふ。集合後登山を始めるが、祭礼に使う道具類の荷物はリュックサックへ分担して納め担いで登る。坂本氏は、お札などを持つといふ。午前一〇〜一〇時三〇分頃、山頂に到着する。まずは、持参した熊手などを利用して神社周辺を掃除し、賽銭箱から賽銭を回収する。毎年祭礼の日に回収することになっている。次に古い幟を取り外しその場でお焚き上げして処分し、新しい幟を掲げる。吉野氏が用意してくれるようになったことから、注連縄も最近掛けるようになったといふ。

その後、神饌を上げる。神饌は、酒、水、米、塩、お頭つきの魚、野菜、果物、お菓子、昆布である。水は、かつては家から持って行ったが一升瓶に詰めたので大変重たく、途中から精進の滝で汲むようになった。ただ、水の流れる量が多くないため汲むのに時間がかかった。そのため、現在は祭礼当日、ペットボトルに水を入れて持って行くようになった。ペットボトルで軽くなつたものの、やはり重いことには代わりのないで、昔と比べて少ない量になつたといふ。野菜は旬のものが多く、かぶ、ほうれん草などである。果物は、リンゴ、ミカンなど。尾頭付きの魚は、鯛が多い。特にどの魚という決まりはないといふ。お菓子はせんべいなどである。基本は海のもの、山のもの、畑のものを持って行くことにあるといふ。

その後、お札を供え、お清めの塩を撒きお灯明を上げる。佳昭氏が、皆様のご健康をお祈りするといふ内容の挨拶をする。その後、参詣者が手を合わせ祈願する。また、最近吉野氏が用意した柵で玉串奉奠をするようになった。佳昭氏、自治会長、代表、全体の順でお参りする。

その後、上げた御神酒を下げ、酒を飲みつつ皆が持参した弁当で、簡

単な直会の食事を取る。御神酒はすべて飲まず、供えた米と供に下ろして、正午頃には下山する。そして午後二時から、自治会館で直会をする。直会は、地区が五組に分かれており、それぞれの組長合計五名が食事の準備をする。食事の準備は男だけであるものだという。かつては、うどんと豆腐一丁程度の簡単なものであったが、最近はオードブルを注文するといふ。昔は、山の帰りに山椒を取ってきて、うどん、豆腐などに載せたといふ。直会が終わると、五組の組長にそれぞれ組の家数のお札と、下げてきた米を家数分半紙に包んだものを分ける。帰宅後組長はこれを組の人に配って歩くといふ。お札の残りは佳昭氏が持って帰る。受けたお札は、玄関口に貼ったりする。竹の先を割って、そこにお札をはさみ畑の脇に掲げる人もいる。かつては、害獣除けのためであったが、最近檜原村の外から来た人が、野菜を持って行ってしまふことへの防止に役立つといふ。

戦前の祭礼に関しては、文献が残っていないことから詳細なことはわからないが、とても賑やかであったと伝えられている。昔の祭礼は数日間おこなわれたといふ、多くの出店が出店され泊まり込みでばかりを打つ人もいた。佳昭氏は、子どもの頃、山麓の商店が山頂へ出店したのを覚えているといふ。

また、白杵山を、都道から鳥居といふ屋号の民家があるところから少し登つたところに、小坂志沢（こさかしざわ）といふ沢があるが、その周辺に、少し平地になつた「ユタテバ」といふ場所がある。昔、ここで沢の水を汲んでお湯を沸かして体にかぶり、精進潔斎した場所だと云われている。そこから、二〇ほど登つたところに、二つの滝があり、一つの滝を精進の滝といふ、ここでも精進潔斎をしたといふ。二回の精進

潔斎をして白杵山へ参拝したと云われている。地元の年配者は、白杵神社の神は「荒神様、あらがみさま」だと言い、それ由祭礼の時は、特に厳しい精進潔斎が必要だったという。賑やかな祭礼がおこなわれつつ、参詣のためには厳格な精進潔斎が必要とされたのである。

4 養蚕信仰と現代に創られた伝承

戦中、佳昭氏の父親が子供の頃、戦中に坂本氏の祖父とお札を近隣に売り歩いたという。養蚕が盛んだった頃、養蚕のために白杵神社へお参りした人が多くいたといい、そういう人を対象に、特に養蚕用のお札を売り歩いたのではないかという。このようにかつては、養蚕の神として崇められていたのである。瓜生卓造氏の『檜原村記聞』に次のような記述がある。すなわち「笹野の式三番は、白杵山（八三五メートル）山頂の白杵神社に奉納された。地元では長く養蚕の神としてあがめられていた。水田はなく、畑も貧弱な檜原の農民は、まず養蚕の成就を祈った」⁽³⁸⁾「式三番も柏木野から発祥した。歴史によれば永禄四年の神社建立の年から奉納舞としてはじめられた、という。笹野はじめ柏木野を援ける形だったが、明治以後は笹野が主力となり、白杵権現にかわって、神明社に奉納されるようになった。」⁽³⁹⁾という記述である。

かつて祀られていた養蚕神のご神体は、榛名山から請けてきたものであった。お蚕のお札を出していた当時、自治会の皆で榛名山へ出かけてお参りしてお札を受けていたという。一〇年程前、養蚕のお札の需要が無くなったため、佳昭氏が榛名山へご神体を返却に行った。

さて、このような養蚕信仰を背景に、白杵神社は猫信仰の神社であるという言説が生まれていくことになる。これは、宮内敏男氏の『奥多

摩』の記述から始まったと考えられる。その記述部分を紹介してみたい。「お猫さんで有名な白杵山だ。（中略）お蚕を養うお百姓が毎年二月初午の日にのぼって守り神たる瀬戸物の猫の像をお借りするのである。お札には来年二つにして納めるのだ。ウスギ山の山名由来は、月の世界の兎が山頂のお猫さんと名月の夜餅をついたからと昔話みたいなのがあろうだが、それは白杵の模写にでも思いついた後世の説話であろう。実際はウスギは薄木で、川苔山のウスバ尾根なぞと同じに、黒木立の茂った山の呼称たる黒山とか黒椴山とか、大黒茂ノ頭などと対立する薄木の山に与えられた呼称と推される」⁽³⁹⁾「嶺に蚕の守護神として地方的に有名な宮があり、その神前には狛犬代りに猫の像がある。これは養蚕の守り神の使姫は猫であるとの俗信に拠ったものなのである」⁽⁴⁰⁾。宮内氏は、瀬戸物の猫を拝借してくる信仰が存在していた様子を記述しているが、現在でも、祭礼の日に小さいお蚕様の像（招き猫のようである）を持ってきて、白杵神社に供え、帰りには下ろして持ち帰る人がいる。かつては、二〜三人ほどそういう人がいたが、今は一人だけとなった。また、白杵山の麓の家で白杵山から転がったという招き猫が川に落ちていて、拾って持っている家があるという伝承もある。そのようなことからであろうか、近世に奉納されたオイヌサマ像に関しても、猫像であると説くことになったのであろう。当時、宮内敏男『奥多摩』は、奥多摩の代表がガイドブックとして重宝されたためか、古くから伝わる言説のように広まっていったのである。

その背景には、白杵神社は養蚕神であることが広く認知され、また養蚕信仰と猫の結びつきの言説があり、実際瀬戸物の猫を拝借する儀礼が存在したことがあろう。そのため、白杵神社の神のお使いが猫と言われ

るようになり、大岳神社に奉納されている狼像とはほぼ同じデザイン狼像が、猫像という言説が展開していくのである。多摩・丹沢の山の神を求めて獵歩され、多くのオイヌサマも見てきた松尾翔氏は『山神戯交山ノ神の御座す山と里往還』で、臼杵権現の狛犬は猫といふことになっているが、どう見てもオイヌサマにしか見えないと述べており、⁽¹⁾松尾氏も大岳・御嶽と同様のオイヌサマであろうと結論づけている。短いスパンの中で創造された伝承が伝播、定着していく様子を、垣間見ることができるエピソードである。

おわりに

まず、第一章では、檜原村では山深い地勢からかつて棲息していたニホンオオカミと交流する機会が多かったからか、狼(オイヌサマ)にまつわる伝承が多々存在している地域であるということ指摘した。すなわち、後に狼信仰が寺社信仰に取り込まれて、盛んに展開する土壌が準備されていたのである。そして、最初に檜原村の狼信仰寺社の中心を成す大岳山と大岳神社を紹介した。大岳山は修験によって勧請された蔵王権現の山岳であり、狼は蔵王権現の使いと位置づけられ現在でも護符が発行され氏子・大岳講のメンバーに頒布されている。次に紹介した貴布祢神社は笹久保の鎮守であるが、境内地に狼像が奉納されているものの、それにとまなう儀礼などは全く失われている。モノばかりが残る状況となっている。次に紹介した柏木野の臼杵神社は、神社を創建したとされる草分けの坂本家と、集落の守護神と考えている地域住民が協力して、祭礼が続けられている。坂本家を中心として展開しているが、地域住民が鎮守と同様にその信仰を支えている様子が見えがえる。また、狼

のお札を手刷りで刷るといふ手法は、消えつつある護符作りの方法を伝えるものであり、この狼信仰の核となる貴重な文化事象と言えよう。また、地域の神職がそれを側面からバックアップが、このように地域の中で様々な担い手によって信仰が支えられている様子もうかがえる。現時点で、このような事例から取り立てて法則性などを示すことができるものではないが、リアルタイムでおこなわれている文化事象をやはり記述しておくことの意義は大きいと感じる。今後も、事例を収集し秩父多摩に展開する狼信仰の総体に迫ってみたい。

註

- (1) 直良信夫『日本産狼の研究』校倉書房、一九六五年、平岩米吉『狼—その生態と歴史—』池田書店、一九七二年、野本寛一「山犬信仰の発生と展開」(『焼畑民俗文化論』雄山閣、一九八四年)、飯塚好「お犬様信仰とその周辺—秩父地方を中心として—」(『埼玉県立博物館紀要』一五、一九八九年)、神山弘「秩父の狼伝説」(山村民俗の会編『シリーズ山と民俗十 山ことばと炉端話』産学社、一九九一年)、牧野眞一「山犬信仰の諸相」(宮本袈裟雄編『民俗宗教の西日本と東日本における構造的相違に関する総合的調査研究』(平成三年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書、一九九二年)参照)
- (2) 「西多摩郡檜原村」『角川日本地名大辞典一三 東京都』角川書店、一九七八年、一七〇—一七三頁、「檜原村」(『東京都の地名』八日本歴史地名大系一三巻V平凡社、一九九二年、一九六—一九八頁)、「檜原村」(『東京学芸大学地理学会30周年記念出版専門委員会編『東京都百科事典』国土地理協会、一九八二年、四三八—四四三頁) 拙稿「武州三峰山と狼信仰—産見舞い・オタキアゲの儀礼の考察を中心に—」(『武蔵大学総合研究所紀要』一八、二〇〇九年)、拙稿「秩父市荒川贄川猪狩神社の狼信仰の展開」(『東京成徳大学人文学部・応用心理学部研究紀要』一八、二〇一二年)、「釜山神社の狼信仰—オタキアゲの考察を中心に—」(『西海賢二編『山岳信仰と村落社会』岩田書院、二〇一二年)など
- (3)

- (4) 『民話と文学』編集委員会編『民話と文学』二七号(民話と文学の会、一九九五年、一三〇―一九頁)
- (5) 前掲直良信夫『日本産狼の研究』二六〇頁
- (6) 小泉輝三朗『檜原・ふるさとの覚書』武蔵野郷土史刊行会、一九八〇年、九三―九五頁
- (7) 小泉輝三朗『檜原・歴史と伝説』武蔵野郷土史刊行会、一九七九年、一八頁
- (8) 前掲直良信夫『日本産狼の研究』二六〇―二六三頁
- (9) 前掲直良信夫『日本産狼の研究』一七八―一八〇頁、甲野勇『東京の秘境』校倉書房、一九八二年、八一―八六頁
- (10) 拙稿「大岳山をめぐる言説とイメージの歴史的変遷」(松尾正人編『多摩の近世・近代史』中央大学出版部、二〇一二年)、『東京府西多摩郡誌(大正三年)』千秋社、一九九三年、六一―六二頁、檜原村史編さん委員会『檜原村史』東京府西多摩郡檜原村、一九八一年、八三〇―八三二頁、東京都神社庁西多摩支部編『西多摩神社誌』東京都神社庁西多摩支部、一九八三年、二八一―二八二頁、東京都神社庁『東京都神社名鑑(下巻)』東京都神社庁、一九八六年、一三〇頁、檜原村文化財専門委員会『檜原の神社』檜原村教育委員会、二〇〇七年、一九―二二頁参照
- (11) 前掲『東京府西多摩郡誌(大正三年)』六一―六二頁
- (12) 大岳神社の伝承によれば、西暦一一年にヤマトタケルが創建したという(二〇一〇年、筆者による吉野高明氏への聞き取り調査)
- (13) 『新編武蔵風土記稿』(大日本地誌大系②第六卷) 雄山閣、一九九六年、九四頁
- (14) 両部神道では広国押武金日天皇の本地は蔵王権現としている(前掲小泉輝三朗『檜原・歴史と伝説』一七―一八頁)
- (15) 前掲『新編武蔵風土記稿』(大日本地誌大系②第六卷) 九三頁
- (16) 二〇一〇年、筆者による吉野高明氏への聞き取り調査
- (17) 前掲『新編武蔵風土記稿』(大日本地誌大系②第六卷) 九五頁
- (18) 二〇一〇年、筆者による吉野高明氏への聞き取り調査
- (19) 市川敏一『大嶽神社と大口真神(お神狗様)について』(『檜原村史研究』二、一九七五年)
- (20) 前掲『東京都の地名』(日本歴史地名大系二三卷)、一一九八頁
- (21) 前掲『檜原村史』八三〇―八三一頁
- (22) 前掲『檜原村史』八三七頁、前掲『西多摩神社誌』二八九頁、前掲『東
京都神社名鑑(下巻)』一三二頁、前掲『檜原の神社』二五頁
- (23) 前掲『檜原村史』五四二頁
- (24) 二〇一二年、筆者による大野益枝氏への聞き取り調査
- (25) 前掲『新編武蔵風土記稿』(大日本地誌大系②第六卷) 一〇二―一〇三頁
- (26) 二〇一〇年、筆者による坂本佳昭氏への聞き取り調査
- (27) 前掲『檜原村史』八二〇―八二二頁
- (28) 『新編武蔵風土記稿』(大日本地誌大系②第六卷) 八四頁
- (29) 『武蔵名勝図絵』によれば、機立の地名の由来は社前の秋川の急カーブがあり、朝暮機紵の音に聞こえたためだという(前掲『武蔵名勝図絵』四九四頁)
- (30) 片山迪夫校訂『武蔵名勝図絵』慶友社、一九六七年、四九四頁
- (31) 坂本家の分家所蔵文書によれば、枕元に現れたのは十一面観音であったという。『武蔵名勝図絵』に「神体観音の姿にて、左の手に五穀の種を入れたる壺を持ちて立ち給う像なり。」(前掲『武蔵名勝図絵』四九四頁)という記述があるが、白杵権現の本地は観音と考えられていて、かつては観音像が神体として納められていたのである
- (32) 春日神社は柏木野の鎮守であり、祭神は天児屋根命である。明治四三年(一九一〇)五月二十日南郷神社へ合祀されたが、柏木野にも社殿が残された。『新編武蔵風土記稿』によれば、春日社とあり、応永四年鎮座。神代神楽も奉納されていたとある(前掲『新編武蔵風土記稿』八四頁)。
- 『武蔵名勝図絵』には坂本家が「春日明神並に白杵権現などを勧請」(前掲『武蔵名勝図絵』四九四頁)と記されており、坂本家は白杵神社を氏神として祀る一方で、草分けとして春日神社を村の鎮守と位置づけ祀つたと考えられよう
- (33) 平野勝『東京にある山里―檜原写真誌』けやき出版、一九九八年。五五―五六頁
- (34) 前掲『檜原村史』八二二頁、前掲『西多摩神社誌』二八四頁、前掲『東京都神社名鑑(下巻)』一三一―一三二頁、前掲『檜原の神社』一一二頁
- (35) 前掲『新編武蔵風土記稿』(大日本地誌大系②第六卷) 八四頁
- (36) 青梅市郷土博物館編『皇国地誌 西多摩郡村誌』(青梅市史料集25巻)、青梅市教育委員会、一九七九年、二五六頁
- (37) 瓜生卓造氏の『檜原村記聞』にも次のような記述がある「昔は笹平から

- の道が表参道として栄えた。至近距離でもある。途中には精進の滝があり、湯立場と呼ぶ入浴施設もそなわっていた。滝と湯立てで身を清めて社に詣でた」(瓜生卓造『檜原村記聞』平凡社、一九九六年、一九〇頁)
- (38) 前掲瓜生卓造『檜原村記聞』一九〇～一九二頁
- (39) 宮内敏男『復刻版奥多摩』百水社、一九九二年、九三～九四頁
- (40) 前掲宮内敏男『復刻版奥多摩』二四八頁
- (41) 松尾翔『山神戯交 山ノ神の御座す山と里往還』青娥書房、二〇〇四年、一七九～一八〇頁

〔付記〕

本稿執筆にあたっては、吉野高明氏・坂本佳昭氏・坂本トシエ氏・大野益枝氏・大沢利雄氏にお世話になった。改めてお礼申し上げます。い。